



261号
2021/3

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



フェリー乗り場のココナツ売り：台湾南部の港町「東港」で見かけたココナツ売りのおじさん。山のように積み上げた軽トラで産地直売でしょうか。薙刀状の刃物は切れそう。買った人は持ち帰ることもできるし、絞りたてをすぐに飲むこともできます。
(台湾屏東県東港 20016年4月 佐々木健之)

'わんりい' 2021年3月号の目次は20ページにあります

今月は久しぶりに、日本でもおなじみの四字成語です。日本では「トラの威を借るキツネ」と言い習わしています。

・>・>・>・>・>・

ある日、おなかをすかせたキツネが、食べるものを探しに森へ出かけましたが、食べ物を探し当てる前に、トラに出くわし、つかまってしまいました。

「さあ、どうしよう！」キツネはとっさに考えて、秘密めかしてトラに言いました：

「私は、神様に天から遣わされた《御遣いキツネ》なんだぞ。森の動物たちは皆知っているんだが、あんたは聞いていないのかい？ もし信じないのなら、森の中を私と一緒に歩いてみて、ホントかどうか確かめたらいいじゃないか！」

トラは直ぐには信じられませんでした。キツネと一緒に森の中をあちこち歩いてみることにしました。森の小動物は思い思いに遊んでいましたが、トラとキツネがやって来たので、みんなはトラを怖がって逃げてしまいました。それを見たトラも、キツネの話を信じて大急ぎで逃げ出してしまいました。

・>・>・>・>・>・

言葉の意味：假＝借りる、虎威＝トラの恐ろしさ。他人の勢力を自分のものと偽って、周りの人に影響を与えることの例え。

使用例：野良猫にびくびくしていた子犬は、飼い主がやってくるのを見ると、急に激しく吠え出した。トラの威を借るキツネのようで可笑しい。

・>・>・>・>・>・

このコラムでは、北京の書店の店先で見かけた、就学前児童向け（いわゆる「お受験準備用」）の絵

本に収録されている四字熟語を紹介しており、今月で40回になります。日本では考えられないような難しい言葉が多くて、毎回ご紹介しながらこれが本当に就学前の子供向けの本なのかと驚いています。

ところが今回は、日本でもよく知られたお話、登場人物(?)もキツネとトラ。子供向けに作られたお話かと思ってしまうのですが、実はこのお話、出処は《戦国策》なのです。前にもお話した通り、

《戦国策》は戦国時代に活躍した諸子百家のうちの「縦横家」に属する人々が諸国をめぐって、国王に国策を授けて宰相に取り立てられるように熱弁をふるっていた時代の話が収められていて、名文が多いといわれます。

しかしこのお話、もとは楚の宣王が北方の守りを固めて功績のあった將軍の昭奚恤を宰相に任用しようと相談した時、將

軍を嫌っていた大臣の江一が、宣王に昭奚恤の任用をやめさせようとして話したもののなのです。しかも、將軍の足を引っ張るだけでなく、北方の国々は国王の威信に服しているのだ、と宣王におべっかを使っているのです。いつの時代、どこの国にも、このキツネのように自分の物でない權威をかさに着て威張るものや、話をした大臣のように權威におもねって付度をする輩がいるのですね。

因みに、これと似たお話が紀元前6世紀の古代ギリシャで、イソップ寓話として語られています。こちらはライオンの毛皮を被って威張って歩いていたロバがオオカミを見て、慌てて逃げだしたというお話です。それで、「トラの威を借るキツネ」を英語では「The ass in the lion's skin.」というそうです。



挿絵：満柏氏

劉禹錫の『踏歌詞』

桜美林大学名誉教授

植田渥雄

今回は劉禹錫（772～742）の『踏歌詞』を取りあげます。劉禹錫は中唐を代表する詩人の一人です。地方官吏の家に生まれ、苦学力行の末22歳の若さで科挙に及第し、順調に出世街道を歩むかに見えましたが、34歳の時、柳宗元らと共に政治改革運動に参画して失敗し左遷され、その後20数年にわたって朗州（湖南省常德市）、連州（広東省清遠市）など言葉も習慣も異なる南方の任地を転々としします。そこで接したのが当地のエキゾチックな風俗と音楽でした。今回取り上げる『踏歌詞』は七言絶句の形式を踏んでいますが、そのモチーフとなったのはその風習です。作者は左遷の屈辱と苦しみの中にあって、唐詩の世界に新しい独自の境地を切り開きました。「踏歌」とは、足を踏み鳴らして歌い踊るところからこの名がつけました。

〔原詩〕 tà gē cí qí sān
踏 歌 詞 其 三

liú yǔ xī
劉 禹 錫

xīn cí wǎn zhuǎn dì xiāngchuán
新 詞 宛 轉 遞 相 傳
zhèn xiù qīng huán fēng lù qián
振 袖 傾 鬟 風 露 前
yuè luò wū tí yún yǔ sǎn
月 落 烏 啼 雲 雨 散
yóu tóng mò shàng shí huā diàn
遊 童 陌 上 拾 花 鈿

〔訓読〕 しん しえんてん たが あいつた
新詞宛転として逡いに相伝え

まげ ふうる
袖を振り鬟を傾けて風露の前

うんう
月落ち烏啼いて雲雨散じ

ゆうどう はくじょう かでん
遊童は陌上に花鈿を拾う

*宛転＝円やかなさま。ここでは民謡の節回しを形容している。*月落烏啼＝夜明け前を示す。*雲雨＝男女の交合を暗示する語。*遊童＝小児。腕白小僧。*陌上＝路上。地上。*花鈿＝かんざし。髪飾り。

〔和訳〕 思いのたけを歌に載せ

袖振り乱して夜露に躍る

月が沈んで烏が鳴けば

かんざしわらべ
落ちた簪童が拾う

春の盛りの満月の夜、年頃の男女が寄り集まって、自作の歌を詠み交わしながら、次々と結ばれていく。一夜の宴が終わるころ、それを待っていたかのように、村の腕白たちが落とし物を漁りにやって来ます。なんとも牧歌的な光景ですが、中には幸せをつかみ損ねて悲嘆にくれる若者もいました。

〔原詩〕

tà gē cí qí yī
踏 歌 詞 其 一

liú yǔ xī
劉 禹 錫

chūn jiāng yuè chū dà dī píng
春 江 月 出 大 堤 平
dī shàng nǚ láng lián mèi xíng
堤 上 女 郎 連 袂 行
chàng jìn xīn cí huān bù jiàn
唱 尽 新 詞 歡 不 見
hóng xiá yìng shù zhè gū míng
紅 霞 映 樹 鷓 鴒 鳴

〔訓読〕

しゅんこうつきい だいていたい
春江月出でて大堤平らかなり

ていじょう じょうろうたもと
堤上の女郎袂を連ねて行く

しんし うた きみあらわ
新詞を唱い尽くすも歓見れず

こうか しやこ
紅霞樹に映えて鷓鴒啼けり

*春江＝春の川。*大堤平＝春期の増水で水かさが堤一杯まで増すこと。*女郎＝若い娘たち。*歓＝恋人。きみ。*見＝現れる。*紅霞＝朝焼け。*鷓鴒＝キジ科の鳥。「行不得也哥哥!」（行かないで兄さん）と鳴くところから、失恋や離別を暗示する語としてよく使われる。

〔和訳〕

春の川辺に月のぼるころ

おとめご たもと
乙女子たちは袂を連ね

きみ
歌い尽くすも君現れず

しやこ
朝焼けの樹に鷓鴒が鳴く

【付記】「踏歌」の行事は日本にも伝わり、平安時代に宮中で流行しましたが、その後廃れ、今では形を変えて熱田神宮や住吉神社などに神事の一つとして残っています。

り はく
李白の五言律詩『送友人』

報告:花岡風子

今月のお題は李白の五言律詩『送友人』(友人を送る)でした。この作品は日本でもかなり有名ですが、いつどこで書かれたものかわかっていないそうです。

李白は玄宗皇帝の下で二年ほど宮廷詩人として活躍しますが、この詩が書かれたのが都長安に行く前だったのか、長安を追放された後なのかも分かっておらず、また送った友人が誰なのかも謎に包まれたままです。

李白は絶句を最も得意とし、律詩はそんなに得意でなかったといわれますが、この詩は完成度の高い作品です。平仄もきちんと整えられていますし、何より対句が見事です。李白といえば奇想天外、切れ味鋭く瞬時に詠み上げるイメージがありますが、この詩はじっくり計算された美しさを感じます。

sòng yǒu rén
送友人

lǐ bái
李白

qīng shān héng běi guō bái shuǐ rào dōng chéng
青山横北郭，白水绕东城。
cǐ dì yī wéi bié gū péng wàn lǐ zhēng
此地一为别，孤蓬万里征。
fú yún yóu zǐ yì luò rì gù rén qíng
浮云游子意，落日故人情。
huī shǒu zì zī qù xiāo xiāo bān mǎ míng
挥手自兹去，萧萧班马鸣。

友人を送る

李白

せいざん ぼく かく

青山北郭に横たわり

はくすい どうじょう めぐ

白水東城を繞る。

この地一たび別れを為し

こ ほうばんり ゆ
孤蓬万里に征く。

ふ うんゆう し い
浮雲遊子の意、

らくじつ こ じん じょう
落日故人情。

ふる こ じょう さ
手を揮って茲自り去り、

しょうしょう はん ば な
蕭蕭として班馬鳴く。

さっそく内容を見ていきましょう。

首聯

「青山」と言えば、幕末の僧月性の漢詩「人間至るところ青山あり」の一句を思い起こす方も多いかと思いますが、ここではお墓の意味ではありません。「青山」と「白水」で自然の色彩を対比させ、「北郭」と「東城」を共に鮮やかな対句を構成しています。「横」たわると「繞る」も対をなしています。

「城」は中国では街を取り囲む城壁のことですね。ここでの「郭」は色々な解釈があります。城壁の外にあるもう一つの外壁を「郭」というので、この詩を詠んだ李白がいた場所がそのような場所だったと、文字通り情景を思い浮かべるのも良いのですが、ここは対句のために敢えて「城」の字に「郭」の字を対照させています。だとすれば両者に大きな違いはなく、作詩法上のテクニックといえるでしょう。しかも「城」は平声で「郭」は仄声ですから律詩の要求にもぴったり当てはまります。

領聯

「孤蓬」とは群れを離れて転がっていく飛蓬(ヤナギヨモギ)のことです。「蓬」は日本のヨモギ(艾)と違って、砂漠地帯に生育する植物だそうです。丸いマリのような形をしていて、風が吹くと根こそぎ飛ばされて大地を転がっていき、繁殖するのだそうです。乾いた黄土高原を砂と風に混じって移動する「孤蓬」の様子に、万里の行程をさす

らう旅人の姿を重ねています。つまり、「孤蓬」とは孤独なさすらいの旅人であり、この時は旅立つ友を送る側であった李白自身もまた、孤独なさすらい人でしたから、相共感するところがあったのでしょう。

頸聯

「浮雲」は漂う雲のように行方が定まらないこと。「遊子」は旅人のことで、ここでは李白の友人を指します。「落日」は夕陽。「故人」は日本語で言う故人と違い、友人ということです。ですから「浮雲」も「落日」もここでは同じく友人の想いを表している、ということです。「〈遊子の意〉が友人の気持ちを表しているのに対して、〈故人の情〉の『故人』とは、友人にとっての故人だから作者自身をさしている、という解釈もあります、自分のことを故人と呼ぶのは不自然ですし、友人を送る作者の気持ちを『落日』に譬えるのもおかしいですよね。そうではなくて、〈遊子の意〉も〈故人の情〉も、ここはいずれも友人の気持ちを作者が代弁しているのだと私は思います。夕陽は沈む寸前にパッと紅く明るく空を染めて、いかにも名残り惜しそうに沈んでいきますよね。その名残り惜しそうに消えていく『落日』に友人のイメージを重ねています。ですから、『浮雲』も『落日』もどちらも去っていく友人の気持ちだと捉える方が自然かと思います。それを作者が代弁しています。そこから、〈送る側〉と〈送られる側と〉の一体感が生まれるわけですよ」と植田先生。

この聯でも、「浮雲」と「落日」、「遊子」と「故人」、「意」と「情」と、見事に対句が組まれています。意味を無理やりこじ付けて穿鑿するよりは対句を楽しんだ方が良さそうですね。

さらに対句について一言付け加えておきますと、律詩では頷聯と頸聯にそれぞれ対句を使うのが通例ですが、それに加えて首聯にも対句を置くことがあります。この詩では首聯の対句の方が鮮

やかで、頷聯の対句はやや緩やかになっています、**尾聯**

「蕭蕭」とはヒヒーンといはなく馬の声です。当時、友人を見送りに行くという時は、前夜に別れの宴をやった次の日に、またノコノコと？ 途中までついて行くという風習がありました。当時、友を送るマナーだったようです。李白もある地点まで送り、「では、ここで」といよいよ手を振って別れようとした時に、お互いの馬も別れを惜しんで嘶いた、という意味です。別れを惜しむのは、友人と自分だけでなく二頭の馬も別れを惜しんでいるということでしょう。人と馬の気持ちを重ねることで、二重に惜別の思いが伝わる表現になっています。

「さて、これほどまでに別れを惜しむような友人だったら、名前くらい分かって良さそうなものだと思いますがね。ひょっとするとこれは、さすらい人としての自分の気持ちを、偶々意気投合した行きずりの人を引き合いにして述べたかっただけのことかもしれません。だとすれば李白一流の誇張表現の一つです。何しろ読者に深読みさせる能力を持った天才詩人李白ですからね。作った当人は次の日には大酒食らって相手の名前も忘れていたかもしれませんよ」との植田先生の解説に一同からどっと笑いがもれました。

さて、ここに「班」という字が使われているのも不思議です。私も先生が説明して下さるまで斑馬（ブチのある馬、あしげ）だと思い込んでいました。「斑」の間違いではないか、という説もあるそうですが、ここは植田先生の解説でとても納得出来ました。

「班」という字は二つの玉の真ん中に刀があります。玉というのは玉のことで、玉石を真っ二つに切り裂く、という意味から「分ける」という意味が生まれました。だから、班分けは、大きな集団を組分けするという意味で日本語でも使っていま

すね。

つまり、ここでも刀で二つに切り裂くが如くに、慣れ親しんだ相棒と引き裂かれた馬、と読むと、更に別れの思いが身に染みてくるのではないですか。「斑のある馬」と「仲を引き裂かれた馬」では、受け取る感覚が全く違いますよね。

この馬たち、もしや番つがいだったら…、なんてことまで想像させられてしまいます。漢詩は一字一句、大変に推敲して作られるそうですから、やはり間違いはなく、別れの切なさを一層印象的に表現する技法だと思われま。

そして後半、植田先生が仰った言葉が印象に残りました。

「詩は読者がそれぞれイメージを楽しめばいいのです。作者と読者の間に感情の共有があればいいのです。その共有も、その時々で違うものですね。人間年をとると出逢いより別れが多くなってきます。それだけ別れへの想いが深まりますよね。人生の中のあらゆる別れをこの詩を通して思い出してみるのもいいかもしれません」

そして、島崎藤村のこんな詩の一節もご紹介下さいました。

小諸なる古城のほとり

雲白く遊子悲しむ

(『千曲川旅情の歌』島崎藤村)

空に浮かぶ白い雲と孤独な旅人の姿……。明治・大正・昭和初期を生き抜いた詩人の何気ない一言にも深い漢詩漢文の素養が感じられますね。

さて今回の詩を鑑賞した数日後、中国人で娘ほど歳の離れた友人が故郷へと飛び立ちました。その数日前、最後に会った時はお互いにハグして涙ぐみそうになりながら別れました。しかし、この時代ですから、その後も LINE で彼女が無事故郷に着き、隔離先のホテルの写真も随時送られてくるので、遠く離れたところへ行ってしまったことを実感しづらく、同じ「送友人」と言っても、李白の

時代とは文字通り隔世の感でした。

今、この原稿を書きながら、李白が味わった別れ、自分のこれまでの人生の様々な別れと痛みを思い出しています。出来れば今後は「班」の字の様な、苦痛を伴う別れは避けたい…。

そう思うのは人情でしょう。でも、多くの時間が流れ過ぎてみれば、その痛みも人生における「一番滋味」(一つの味わい——テレサ・テンの歌『独上西楼』より)ではなかったか、とも思えてくるのです。

さて、最後に「浮雲」という表現がこの詩以外でも使われている例をいくつかみてみましょう。

●古詩十九首之一

浮雲蔽白日	ふ うん はくじつ おお 浮雲白日を蔽い
遊子不顧返	こへん 遊子顧返せず

これは遠方に赴任した夫を待つ妻の気持ちを表した詩です。ここの浮雲は、夫に新たに出来た良い人を指し、遊子は夫を指します。

●論語(述而第七)

不義而富且貴、於我如浮雲。

不義にして富み且つ貴きは、我に於いては浮雲の如し。

孔子の言葉です。

不正な方法で金持ちや偉くなっている輩がいるが、私にとっては価値のないことだ。

●『登金陵鳳凰台』李白

鳳凰台上鳳凰游，風去台空江自流。
吳宮花草埋幽徑，晉代衣冠成古丘。
三山半落青天外，二水中分白鷺洲。
總為浮雲能蔽日，長安不見使人愁。

最後の二句尾聯に「浮雲」とありますが、ここでは玄宗皇帝の邪魔をする取り巻連達、そして、蔽われている「日」は玄宗皇帝を指しているのだそうです。

本格的なコロナ禍もとうとう2年目に入ってしまった。B.C.時代が懐かしい。紀元前 (Before Christ) ではなく、最近の使われ方であるコロナ前 (Before Corona) の時代。2005年 (15 B.C.?) 以来、年に1, 2回は河南省に出張していたが、一昨年2019年末を最後に、昨年はずいぶん行くことができなかった。インターネット等を通じて得られる情報も、ぜひ、現地に行ってこの目で確かめたいと思っているが、残念ながら、この原稿を書いている時点 (緊急事態宣言下の2月上旬) では、今年の見通しも決して明るくない。

さて、前回 (昨年12月号) は戚建庄著『成語典故与河南名勝』2005年、河南人民出版社 (前回同様、以下、『成語与河南』) に拠って、真藤建志郎著『「四字熟語」の辞典』1985年、日本実業出版社やウェブサイトの助けも借りながら、四字熟語に見える河南について綴った。今回はその続きから始めることにしたい。

とりあげるのは、^{ちゅうげんちくろく}中原逐鹿 (中原に鹿を逐う) である。これは、実際に文章・会話中に用いるかどうかは別にして、日本人にとって馴染み深い四字熟語の1つであろう。『成語与河南』によると、「中原」とは中国の中部地域、あるいは河南を指し、「逐」すなわち追逐は派生して争奪を意味する。さらに「鹿」は狩猟の対象であり政権、天下の比喻、全体として、群雄並び立って天下を争奪することを表す。

この四字熟語の元には「秦失其鹿，天下共逐之」 (秦は其の鹿を失い、天下は共に之を逐う) という言葉がある。ここでは、明らかに鹿を帝位、政権に置き換えると意味がすっきり通る。では、なぜ鹿なのか。この四字熟語について深く考察した桐本東太氏は、鹿は祭祀において犠牲とするため君主がその領土内で飼育しており、古代社会において祭祀儀礼が最も重要な国家の役割であったことを考えると、犠牲獣である鹿を失うことが国家の滅亡を意味していた、という説を唱えている (桐本東太「中原逐鹿考」『東洋文化』第76号、1996年1月)。

ところで、先の言葉は『成語与河南』によると班固

編『漢書』の「蒯通伝」に出ていると書かれており、一方、桐本氏は司馬遷編『史記』の「淮陰侯列伝」にある言葉として紹介している。念のため、インターネットで原文を調べてみたところ、たしかに、『史記』、『漢書』の両方にこの語句は存在した。中国の古代歴史書を代表する両書に同じ表現があるということは、さらに共通の出所があるのかもしれない (なお、『成語与河南』では熟語の出典としているが、「中原逐鹿考」では出典という明確な表現はなされていない)。

中原逐鹿がより直接的に出てくるのは、唐代の宰相であった魏徴ぎちようによる漢詩「述懐」の一節、「中原還逐鹿，投筆事戎軒」 (「中原に還た鹿を逐うため、文筆関係の仕事を止めて軍関係に従事する」、日本語訳は「Web 漢文大系」を参考にした) であることが知られている (『「四字熟語」の辞典』ではこの漢詩を出典として挙げている)。

言うまでもなく、元来、中原逐鹿が意味する権力抗争は、平和裏になされるのではなく、主に軍事的手段によるものであった。その意味で、中原逐鹿の歴史は、はるか昔、今から5千年ほど前、中国の古籍に記されている最初の戦争に遡る。神農氏しんのうしと斧燧氏ふすいしが河南東北部の肥沃な土地を奪取すべく起こした戦争である。この戦争に勝利した神農氏は神農部落を造り、その後の崛起繁栄の基礎を築いた。

また、今から4600年余り前、炎黄 (炎帝と黄帝) と蚩尤しゆうが中原の地を巡って繰り広げた中国原始社会最大の戦争「涿鹿之戦」^{たくろく}も中原逐鹿に数えることができる。主戦場「涿鹿」は現在の河北省涿鹿県である。勝者となった炎黄の子孫は、やがて華夏民族 (中華民族) を形成し、中華民族最初の王朝・夏王朝の建立に連なる。なお、ここにも「鹿」が登場しているのは単なる偶然であろうか。

炎黄二帝は伝説上の人物であるが、現在、河南省鄭州市郊外の「鄭州黄河風景名勝区」にはその巨大な塑像がある。2007年4月18日には盛大な落成記念式典が開催された。その様子はインターネット上で知



「炎黄二帝」（2007年5月撮影）



「同盟山武王廟・飲馬池」（2010年11月撮影）

ることができるが、写真は落成まもない同年5月27日に私が撮ったものである。

さらに、「鳴条之戦」が続く。これは、紀元前16世紀初め、商族の首領・湯が率いる戦車70台と兵士6,000人が「鳴条」（現在の開封一帯）で夏桀を打ち破り、商(殷)朝を打ち立てることになった戦争を指す。その商朝も約500年続いたのち、終末を迎える。またしても中原逐鹿である。

周武王が商紂王の討伐に立ち上がった。かの酒池肉林の紂王である。周武王率いる軍隊は諸侯と連合して、商の都・朝歌から70キロメートル余りの牧野（現在の河南省新郷市）において、紂王と戦火を交える。これを「牧野之戦」と言う。この時、紂王の主力部隊は外地にいたため、牧野の前線で戦ったのは奴隷や捕虜であった。結果、紂王軍は大敗し、商朝は滅亡して周朝が建立した。

「牧野之戦」に関連して、私は2010年11月14日に新郷市獲嘉県に仕事で行った際、当地の「同盟山武王廟」を見学した。これは武王と800の諸侯が共に紂王を倒すべくこの地で同盟を結んだことを記念する施設である。武王が商の打倒に成功したのち、人々が武王に感謝の意を表そうと建造した。写真は武王が掘って馬に水を飲ませた八角井戸「飲馬池」である。

『成語与河南』に従うと、その後も、三国志の「官渡之戦」(西暦200年)をはじめ、各王朝の交代を巡る戦いは、中原の地において前後数多く発生している。「圍魏救趙」、「楚漢相争」、「昆陽之戦」、「岳飛抗金」等である。これら4つうち、最後の「岳飛抗金」は12月号でも触れたように岳飛による北宋の復興を目指した金国との戦いを指す。

1番目の「圍魏救趙」は戦国時代に中原で繰り広げられた魏、趙、斉の間の抗争を指す。それ自体1つの四字熟語となっており、『成語与河南』にも独立して取り上げられている。『「四字熟語」の辞典』の見出し語となっていないので前回(1月号)に決めた選択基準に反するが、興味深いのでやや詳しくみることにする。

紀元前353年、趙国は魏国に首都・邯鄲を包囲され、危機に瀕したため、斉国に救援を求めた。それに応えて、斉威王は田忌と孫臏を派遣したが、田忌が直接、邯鄲に向かおうとするのに対して、孫臏は次のように主張した。魏国は精鋭部隊が趙国との戦いの前線に出ていて、内部は手薄である。そこで今、魏国の首都・大梁（現在の開封市）を攻めれば、本国を守るため、魏国軍は本国にとって返すであろう。斉国は彼らの疲労困憊に乗じて、途中で迎え撃てば、邯鄲の包囲を解くことができるだけでなく、魏国軍を打ち破ることができる。この孫臏の策が実行され、その通りの勝利となった。この四字熟語の出典は『史記』(孫子呉起列伝)である。同じ孫子とも呼ばれるが孫臏は、『孫子の兵法』の孫武とは別人(孫武の末裔)で、『孫臏の兵法』を著した。

毛沢東は「抗日遊撃戦争的戦略問題」(「抗日遊撃戦争の戦略問題」1938年5月)でこの四字熟語を次のように引用している。「如果敵在根拠地内久踞不下，…以一部留在根拠地内圍困該敵，而用主力進攻敵所從來之一帶地方，在那里大肆活動，引致久居之敵撤退出去打我主力，這就是『圍魏救趙』的方法。」(「もし敵が根拠地内に長くいすわっているようなら、…一部を根拠地内にとどめてその敵を包囲し、主力軍

をもちいて、敵が以前までいた地方一帯に進攻し、そこで派手に動きまわり、いすわっている敵が撤退してわが主力軍を攻撃しにくるよう、おびきだすのである。これがつまり、『魏を囲んで趙を救う』という方法である。」竹内好訳、小野川秀美責任編集『世界の名著64 孫文・毛沢東』中央公論社、1969年)。

2番目の「楚漢相争」(「楚漢之戦」とは紀元前206年8月から紀元前203年12月にかけて西楚の霸王・項羽と漢王・劉邦が覇権を懸けて展開した大規模な戦争である。最終的には項羽の敗北死と劉邦による西漢王朝の建立をもって終結した。その経緯は、京劇の演目として日本でも人気の高い『霸王別姫』に描かれている。私も東京でNPO法人「京劇中心」の招へいによる公演を、2002年(大連京劇団)、2009年(天津青年京劇団)、2014年(天津京劇院)の3回、鑑賞した(2018年にも湖北省京劇院による公演がなされたようである。なお、「京劇中心」の京劇招聘公演事業は2019年に終了した由、今後日本で本格的な京劇を鑑賞することは難しいのではないか)。映画では、陳凱歌監督、張国榮、鞏俐、張豊毅主演で1993年に公開された『霸王別姫』(邦題:さらば、わが愛/霸王別姫)が知られている(ただし、京劇とは全く別物)。

では、3番目の「昆陽之戦」とはどのような戦いか。これは、王莽が西暦8年に創建した新と漢の間の決戦である。主戦場となった「昆陽」は現在の河南省葉県である。この戦いで名を馳せたのは、漢の將軍・劉秀(のちの漢光武帝)である。この戦いは中国史上少(少)が大(多)を破った例として知られる。一説によると、昆陽で対峙した際、王莽の新軍は42万であったのに対して劉秀の漢軍は1万にも満たなかった。この戦いで勝利した劉秀が25年に再興した漢(後漢あるいは東漢)は、その後220年まで200年近く続くことになる。

俗に「得中原者得天下」(「中原を得る者は天下を得る」とも言われる。こうして見ると、神農氏と斧燧氏の戦いから「岳飛抗金」までの4000年間、戦争続きである。中原逐鹿の陰には、「中原」に暮らす人々の莫大な犠牲があった(外地へと戦火を逃れる移民も膨大な数に上った)。



「鄭州市中原区政府」(2007年5月撮影)

ここで、あらためて、「中原」とは何か(どこか)が気になってきた。「中原」とは、もともと文字通り、野原の中の意味である。『詩経』(小雅・小宛)の一節に「中原有菽 庶民采之」(「野原の中に豆があれば、庶民はこれを(摘んで)采る」、前田康晴訳、石川忠久著『詩経』(中)新釈漢文大系第111巻、明治書院、1998年)とある。それが、やがて、先に書いたように、広い意味では中国中部、とりわけ黄河の中下流域、狭い意味では河南省という特定の地域を表す名称として用いられるようになった。

現在、河南省の省都(省会)である鄭州市には市街地を分ける6つの行政単位(区)の1つに「中原区」がある。実際訪れてみると、当然のことながら、中原の文字を至るところで目にする。写真は2007年5月26日に撮った「中原区」の役所(政府)の入り口である。

ところで、私が育ったのは、現在の川崎市中原区(区になったのは1972年)である。以前(2016年2月)鄭州の知人が来日した折、川崎市中原区の(私が通った)「中原小学校」、「中原図書館」、「中原郵便局」等を案内すると、知人は、私が鄭州市でそうであったように、その看板・標識を興味深そうに写真に収めていた。

ここは一つ、同名の誼^{よしみ}で区レベルの姉妹友好関係を結んでどうか。面積と人口を調べてみると、川崎市中原区が14.7平方キロメートルに26.4万人(2020年9月1日現在の推計)であるのに対して鄭州市中原区は97.1平方キロメートルに104.8万人(2017年)と、かなりの差はあるものの、規模の面では実現可能に思う。

中国の面白い神話・伝奇物語(4)

顧傑

わんりいの皆様、新春快樂、牛年吉祥

前回は唐伝奇を紹介させて頂きましたが、少しでも興味を持っていただけたでしょうか。

前号でもお話しましたが、政治の安定、経済の発展により、中国唐朝は前代未聞の文化的自由と経済的発展を享受しました。その中で生まれた「聶隱娘」、じょういんじょう「鶯鶯伝」、おうおうでん「長恨伝」などは今でも中国の文化に影響を及ぼしています。

そんな中から、今回は 2015 年実写映画「黒衣の刺客」として描かれた、「聶隱娘」の物語についてご紹介したいと思います。

■刺客聶隱娘の物語

栄華を極めた唐朝も、安祿山の乱で衰退の兆しが見えだしたころ、魏博という地方の武将「聶鋒」が、女の子を一人儲けた。非常に靈気のある子で、将来有望だといわれていた。

そして時は過ぎ、聶隱娘が 10 歳になった日に、ある尼僧さんが訪ねてきた。聶隱娘の母は神仏を深く信じているため家の中に招いたが、なぜか聶隱娘を見て異常な喜びを見せた尼僧は「その子を預からせてくれぬか」と申しでた。聶鋒は大いに怒って尼僧を追い出したが、尼僧は捨て台詞を残して去っていった。

「どこに隠そう無駄だ。私は必ず連れて行く」

聶鋒は恐れを感じて、手下に娘の警護を厳命したが、誰も気づかぬうちに、聶隱娘は消えてしまっていた。

さらに 5 年の歳月を経て、この尼僧と一人の少女が聶鋒の前に現れた。誰が見てもその少女は聶隱娘であり、聶鋒も確信はしているが、昔の天真爛漫な面影はどこにもなかった。尼僧が去った後、聶隱娘に今までの話を聞き出したが、それは軍人である聶鋒でさえ、恐怖を感じるものだった。

「最初はどこか山奥の岩穴に辿り着いた」

と、15 歳の聶隱娘が語り始めた。

「そこには、同じような年の二人の先輩たちがい

た。ついたばかりの私に先輩たちが果物を少々食べさせてくれたが、そのあと、先輩たちが食事しているのを見たことはなかった」

聶隱娘は淡々とこの 5 年間について話したが、どれもみな現実ばなれしている。

「師匠に、ある薬をもらって飲んでからは、私も体が軽く感じられて、食事が必要なくなった。それから師匠に剣を一本もらって、修練として山のけだものたちを狩ることになった。一年後、サルはもう百発百中仕留められた。二年後には、虎や豹などと対決しても、軽く首を取ることができた。三年後には飛ぶことができ、飛鳥や鷹さえ狩ることも可能になった。修練のあと毎日磨いた剣は、ナイフのように短くなってしまった」

「四年目になったある日、師匠と知らない町に下った。師匠はある人を指さしながらその人の罪を数えあげて、ナイフを一本くれた。私は昼ひなか、誰にも気づかれずその人の首を取った。そして戻ってから師匠にもらった薬でその首を溶かした。師匠は私の武芸の完成を認め、帰ることを許してくれた」

聶隱娘が平然と話すのを聞いて、聶鋒は驚きのあまり言葉もなかった。聶隱娘は、夜になると黒服をまとい出かけて、朝になるといつの間にかもう家に戻っていた。見かけは普通の女の子で、聶鋒の奥さんは娘と再会できて喜んだが、以前の娘とはまったく違ってしまったと感じていた。

ある日、鏡を磨く少年が訪ねてきた。貧乏人で美しくもないが、なぜか聶隱娘がどうしても結婚したいと言い出した。心に有る違和感を早くなくしたい為か、父聶鋒も快諾した。少年は鏡を磨くことしかできないが、父から支援をもらっていたので暮らしには困らなかった。

さらに数年後、魏の長官が聶隱娘の能力を聞いて、大金を出して招いた。その長官は他所の長官である「劉」という人に恨みがあって、聶隱娘に暗殺を依頼した。

聶隱娘と夫が劉長官の任地に着いたのはお昼時。

市街地まではまだだいぶ遠いのに、何人かが露店を開いていた。空には鳥が飛んでいたの、夫はスリングショットを持ち出して撃ち落とそうとしたが、3回も失敗した。しかし聶隱娘は一発で命中させた。と、その時、露店にいた人が二人に近づいて、跪いて言った。

「聶隱娘様ご夫妻ですね。主人に命じられて、お迎えに参りました」更に続けて、

「ご無礼をお許しください。劉からは、『男女二人がこの地に来るだろう。男は飛鳥を三射しても当たらないが、女は百発百中だろう。その二人をお迎えするように』と命令されていました」

聶隱娘はそれを聞いて、進み出て言った。

「以前聞いたことがあります。劉長官はきっと神人なのでしょう。ぜひご案内ください」

劉と会うとすぐ、聶隱娘は跪いて

「申し訳ございません。もうご存じだと思いますが、私たち夫婦は暗殺の命令を受けています」

劉はすでに知っていて驚くことはなかった。

「君らも主人の命令を忠実に実行するだけなので、私が責める理由はない。むしろ私の場合も同じ選択をするでしょう」

聶隱娘はもう一度頭を下げ、

「魏の長官は、貴方様には及びません。私共は貴方様にお仕えしたいと思います。ただ…」

と、一拍を置いて、聶隱娘はまた続けた。

「私たちが戻らなければ、きっと魏の長官は新たな刺客を送ってきます。明後日の夜には精精児せいせいが来るでしょう。私は虫に変身してあなた様の鼻に潜み、時が来たらお守りいたします」

劉もそれを聞いて納得した。

二日後の夜、劉が横になったら、突然部屋の中に風が起こり、空中で金属が交わる音がして、ふっと、一人が空中にあらわれて地に落ちたが、すでに死んでいる。聶隱娘も姿を表して、薬でその死体を溶かしつつ、

「二日後の夜、今度は妙手空空くうくう児がくるでしょう。空空児は神術が使い、互角に戦える人はいません。その武術は私より上のため、尽力はしますが保証はできません。その日まで、必ずこの玉を首につけていてください」

と言って、玉の首輪を劉につけながら言う。

「私はまた虫になり貴方様をお守りします」

二日後、劉は横になったが眠れなかった。夜が更けて、急に「パン！」と首で何かが碎ける大きな音がした。聶隱娘が姿を表し、跪いて、

「おめでとうございます。空空児はプライドがあって、一撃で仕留められなかったの、諦めて、もう千里のかなたに行ってしまったようです」

劉が玉の首輪を見たら、やはりナイフの跡があって、その深さはあと少しで首に届くところだった。劉は喜んで、聶隱娘に心から礼を言った。

唐の元和八年になり、劉は皇帝に会うため都に出ることになったが、聶隱娘は同行の依頼を断り、

「私は諸国をめぐる修行を続けます。以前私が貴方様をお助けしたことを認めてくださるなら、どうか私の夫に何か仕事を与えてください」

劉が同意すると、いつのまにか聶隱娘は消えていた。劉が死んだ時、聶隱娘が馬に乗って駆け参じ、墓の前で大泣きをして、また去って行った。

何年も経ってから、劉の息子がある地の長官に就任した際、市街地で聶隱娘と偶然出会ったが、以前のまの姿で、白い馬に乗っていた。

「貴方には大きな災いがある」

と、警告しながら丸薬を取り出して

「来年には仕事をやめてすぐ故郷に戻るべきです。さもなければ私の薬もお守りできません」

劉の息子は信じなかったが、聶隱娘にお礼を言うと、聶隱娘もまたどこかに消えていった。一年後、劉の息子は仕事を辞めなかった。その後しばらくすると、はたして彼は仕事先で死んだ。以後、聶隱娘の姿を見た人は、誰もいない。

~~~~~

今回は聶隱娘の物語をさせて頂きましたが、如何でしょうか。

色々おかしいなどころも勿論あると思いますが、懐かしいものもありませんでしたか？ 例えば空空児や精精児と対決したところなどは、西遊記の孫悟空に似ていませんか？

さて、次の回は、このお話の簡単な解説をしたいと思います。ぜひ楽しみにしてください。

## 「秦皇島」をご存知ですか？……(2)

文と写真 吉光 清

老龍頭で海から離れた万里の長城は角山に向かって高度を上げながら北上する。秦皇島市山海関区内にある観光ポイントである「角山長城」に12月初旬に出掛けることが出来た。郊外に出掛けようとして困るのは「足の確保」である。都合の良い公共交通機関は期待できず、タクシーで乗り付けても、帰ろうとした時にタクシーが居ないのでは途方に暮れてしまう。多少贅沢でも信頼のおける運転手を紹介してもらい時間決めて利用するのが賢明である。この時は日本人の同僚と二人でタクシーを借り上げた。

### ■「角山長城」に登る

車のナンバーを手掛かりにお目当てのタクシーを探し出し、角山長城の入り口に乗り付けた。観光シーズン外で駐車場には車が数台停まっているだけだった。城門と見紛う高さの入場口が3つ並んで建っている。その後方には抜けるような青空と白茶色の山の稜線が望まれた。目を凝らすと長城がその尾根伝いに続いており、くっきりとスカイラインを描いている。入場料はパスポートの年齢確認で半額(10元)になった。構内に入ると長城への登り口までは緑豊かな散策路になっていて、「角山長城」と刻んだ石があった。登り口から城壁の上に出ると、足元から延々と蛇行して登ってゆく万里の長城が望まれる、その迫力と悠久の歴史に触れた感動に興奮を覚えた。

歩き始めは傾斜が緩やかで三車線もある幅広の石畳の道路であり、両側に黒灰色のレンガを積み上げ、白の漆喰いで固めてある。敵の攻撃を受ける片側は高く積み重ねられており、随所に敵からの矢を避けつつ攻撃する「狭間」となる切込みが造られている。我々の他には遙か前方を2、3のグループが登っていた。

広い「踊り場」が連続するようだった通路が登るにつれて徐々に狭くなり角度が急になってくる。足元の石畳は磨かれたように滑り易い。途中からの避難路は無いので、ギブアップしたら同じ道を引き返すしか無いが、下りは危険である。滑ったりバランスを崩すとボブスレーのコースのようにカーブした急坂を転がり落ちるしかない。途中で数か所、腰までの高さの頑丈な金属製の柵が埋め込まれていたが、登る際の援けにはなら



下から見る角山長城の見張り台(2016年12月撮影)

ず、落下を途中で食い止めるための設備なのだと理解した。往時、この道を哨戒し、戦闘の際には迅速に移動しなければならなかった守備兵の苦勞が思いやられる。

勾配が急な分、足元の高さはどんどん高くなる。汗を拭きながら周りを見ると、近くには烽火を上げて長城の守備隊に急を知らせる「烽火台」や戦闘時の拠点となる「敵台」が見えた。登って来た通路は驚くほどの急角度で足下に見える。山海関に繋がる辺りは遠くかすんで見通すことは出来なかった。

角山長城のランドマークとなる見張り台が見えて来た(上の写真)。道幅は人がようやくすれ違えるほどに狭くなり、さらに上ると一人が通行できるだけの幅になり、壁は無くなり階段だけになってしまう。手摺りが設置されている箇所もあった。最後の登りは、垂直な鉄の梯子を2回使うようになっていた。梯子に取りつくとも冷たく、背負ったザックが急に重く感じられ、思わず手と肩に力が入った。風が全く無い日で幸이었다。梯子を登れない観光客のために、ここだけは迂回路が作られていた。

見張り台は数人が休息できる広さの石造りの小屋だった。多少の風は防げるだろうが、高所にあるため、寒さや悪天時の強風には成す術が無かったに違いない。登り始めてから30分余りが経っていた。

### ■「見張り台」の向こう側へ

見張り台からは360度の展望を楽しんだ。北側を見

ると長城はいったん鞍部に下り、再び高度を上げ更に高い頂上を目指して尾根を登って行く。

登りと反対側の梯子で見張り台から降り、尾根を少し外れて西側に下ったところに分岐点の標識があった。右手方向に尾根を巻きながら進むと「索道上站」「角山寺」へ、左手方向は「長城下山」とあった。距離や所要時間の目安は何も書かれていなかった。

遥か下まで続く斜面を左に見ながら、山腹を巻いて緩やかに登る道を進んだ。冬枯れで道の傍らの草や灌木には緑は無いが、斜面の所どころに松のような常緑樹が見える。のんびり山道を歩く風情は日本での冬の低山歩きのようにであった。

やがて、山の間から遥かに燕賽湖が見え隠れするようになった。右側を仰ぎ見ると木立の間から相変わらず長城の城壁が見えている。お寺の山門が見えた。小さなお寺で「棲賢寺」とあった。境内には雪が消え残っていた。さらに登ってゆくと「共工亭」と書かれた展望台があった。此处からは眼下に燕賽湖が眺められる。燕賽湖はダム湖らしく複雑な形をしていた。展望台の足元にロープウェイの鉄塔が見えていた(下の写真)。後で調べたところでは、ロープウェイは燕賽湖の岸から索道上站まで客を運び、更に「懸陽洞」(後出)がある「長寿山景区」まで延びている。シーズンオフで稼働している気配は無かった。

長城は角山の頂上付近で直角に曲がって東の方向に向きを変え、河北省と遼寧省との境界の山々にぶつかると再び北上し、その先で東西の二方向に分かれるようである。東は遼寧省内に延び、西は秦皇島市を横断し、承德市と唐山市の境界の山脈に沿って西に延び、北京市の北部に到達するはずである。

此处から引き返すことにした。来た道を分岐点まで



「共工亭」から燕賽湖を臨む (2016年12月撮影)

戻り、そこから下山路を下った。開けた斜面を下る道の右側にはロープ付きの白いポールがズーッと続いていた。正午を過ぎて空腹も感じられたが弁当は持参していなかった。歩きながらスナック菓子とミカンを食べた。ミカンがとても美味かった。

途中で公衆トイレがあった。扉も仕切りも無く、床のコンクリート上に便槽の溝が道路に直面して並んでいただけだった。雪が積もっていて幸いだった。

30分余りで、山道を下り切って散策路に合流する手前に「六角亭」と、何故か「李自成」の塑像が建っていた。再び登り口の階段から城壁に登り、登りと逆の方向を見ると土産物を売る露店が建っていた。しかし、記念に買いたくなる品物は無かった。傍らには二頭の馬が曳いている戦車の模型が置かれ、装備を付けた兵士の人形が立っていた。客は誰も居なかった。駐車場に待たせてあったタクシーで食堂に寄り、昼食を食べて北戴河まで帰ったら4時過ぎだった。角山長城を借り切ったような1日だった。

#### ■山海関にある「孟姜女廟景区」

天下第一関から遠くない場所に見逃してはならない観光ポイントがある！ ことを知ったのは、5回目の秦皇島訪問を終えた後だった。それまでは残念ながら全く知らなかったのである。天下第一関は二度も訪れたというのに本当に悔やまれた。その観光ポイント<sup>もうきょうじょびょう</sup>というのは「孟姜女廟」である。

現地で購入した「环渤海秦皇島地図」を見ると、「山海関站」の北方に角山長城や燕賽湖があり、駅の東方に目を転ざると「孟姜女廟景区」の文字が見える。高速道路を利用する場合は「孟姜出入口」で降りると目と鼻の先である。周辺には孟姜女に由来するだろう「孟姜鎮」や「望夫石(後出)」の地名も見られる。

旅行社の情報サイトを見ると、この景区の中には、108段の階段の先に「貞女祠」の文字が書かれた山門(創建は宋代以前、明代に再建)があり、山門をくぐった先の「孟姜女殿」には「萬古流芳」の扁額が掛かり、彩色された孟姜女の塑像が祀られているようである。ここは「AAAAA 国家級旅游景区」の指定を受けた最初の観光地だという。「乾隆帝」の詩を刻んだ岩もあり、高さ3.2メートルの「跳海銘貞像」や「海眼像」などの孟姜女の塑像や、孟姜女伝説を展示する観光用施設も建設されたようである。

#### ■「孟姜女の伝説」とは？

中国人ならば誰でも知っているという孟姜女の伝説とは「万里の長城を涙で崩落させた女性」という話である。日本の子供向けに刊行された『中国の民話―なみだでくずれた万里の長城』では、「瓢箪から生まれ、孟家と姜家に育てられた孟姜女は万里の長城建設の徴用から逃れて来た万喜良と出会い、婚礼を挙げた。ところがその晩に新郎は役人に連れ去られ、3年経っても何の連絡も無く、夫の身を案じて旅に出た孟姜女は数年間の放浪、苦難を乗り越え、遂に夫が働いていた長城に辿り着いた。しかし、夫は既に長城の下に葬られていた。孟姜女は悲しみのあまり、気を失うまで泣き続けると、雷がとどろき、大風が吹き、大地が揺れ、砂が舞い上がり、万里の長城は数十里にわたって崩れ落ちた。これを神の怒りと考えた皇帝は孟姜女を妃に迎えて神の怒りを鎮めようとしたが、彼女は長城建設で命を落とした人々を厚く弔うことなどの条件を出し、海の傍で営まれた夫の葬式の終了後に長城から海に身を投げた（始皇帝の望みを拒否した）」という悲劇的な話になっている。

孟姜女の伝承や孟姜女祠などの関連遺跡について河北省をはじめとする11省25か所にわたり調査した著作に拠れば、各地に残り、伝承されてきた説話は一様ではないという。つまり、「始皇帝、長城建設、夫の徴用と死、慟哭で長城を崩落させる」ことは共通するとしても、孟姜女の「出生や名前の由来」、「夫の氏名や素性」、「夫と出会った経緯」、「放浪した土地や地名の由緒」、「放浪中の超常的エピソード」、「辿り着いた長城の場所と夫の遺骸を見つけ出した経緯」、「皇帝に約束させた内容」、「孟姜女の最期」などに様々なバリエーションが見られるという。

### ■山海関周辺の伝承について

孟姜女伝説の原型となったのは秦代に先立つ春秋時代の山東省にあった故事と言われる。それが、古い歴史書に記録され、巷間に広がる中で、各地に残されていた別の故事や言い伝えと混じり合い、独自の展開を持つ説話が多数発生し、その後「孟姜女」という「統一的なヒロイン」の成立と「万里の長城」という舞台の設定を得て、一つの悲劇的な話にまとめ上げられて語られるようになったものらしい。

山海関の周辺には、この伝説のクライマックス場面に相応しい舞台装置が揃っている。近くに始皇帝の名を冠した「秦皇島」、海に接する万里の長城、「孟姜女



「孟姜女墓」と伝えられてきた岩礁（百度百科より）

墓」と伝えられてきた山海関の東海上の岩礁（上の写真）、孟姜女が一晩中、小山に登り下りして堅い石に足跡が残ったという「望夫石」、夫が死亡に至った経緯が伝説として残る「縣陽洞」などが存在し、「蒙恬」や「趙高」という実在した人物が登場することも信憑性を高め、この伝説全体が此处ではあたかも歴史的な事実としてリアルに感じられそうである。

伝説が各地で口承されてきた過程では、「おとぎ話」と同様に、それぞれの土地、それぞれの時代の人々の願いや教訓、道徳観や信仰なども反映され、変遷を遂げてきたに違いない。それぞれの伝承からは、悲劇に対する庶民の同情、共感、応援の心情や、「夫婦の愛情」「女性の強さ・貞淑さ」「権力への抵抗」への賛美、「苦勞している者を天や神は見捨てないで欲しい」という願望などが感じられる。

結末は悲劇でも、一面では、圧倒的な権力を相手に一矢を報いた、痛快な物語にもなっている、例えば「忠臣蔵」のように。それだから歌や演劇の題材として現在まで生き続けているのではないだろうか。

山海関周辺の伝承では、「海に沈んだ孟姜女を渡さない龍王に怒って、始皇帝が竜宮城に危害を加えようとしたので、龍王の娘が孟姜女に化け始皇帝に嫁ぎ、これを挫いた。男児が生まれ、すぐ山に捨てられたが虎に育てられ、後に秦を滅ぼした『項羽』になった」という、何とも壮大な物語が展開している。

中国旅行が再び可能になったら、筆者が真っ先に訪れたい場所の一つになっている。（続く）

### ●参考資料：

- 1) 唐 亜明『中国の民話 涙でくずれた万里の長城』2012、岩波書店
- 2) 渡辺 明次『孟姜女口承伝説集』2008、日本僑報社

1992年に「小学館」から発行された、北京・商務印書館との共同編集による「中日辞典」には、103項目の「囲み記事」なるものが載っています。「囲み記事」とは、ある言葉について、総合的に・詳細に説明したものです。

今回は、この中から【元素 yuán sù : 化学元素】を取り上げようと思います。中学校の物理・化学の時間に習ったアレです。水 (H<sub>2</sub>O) の H : 水素、O : 酸素が元素です。理系の方は「水兵 (H.He) リーベ (Li.Be) 僕 (B.C.N.O) 船 (F.Ne) そ一曲が一 (Na.Mg.Al) シップス (Si.P.S) クラーク (Cl.Ar.K) か (Ca)」という語呂合わせで、原子番号1番から順番に20番までの元素を記憶された方もおいででしょう。これらの元素が中国語ではどのように表現されているか、その表現に関わる意外な発見を紹介しましょう。

次ページ表を見てください。

現在のところ確認されている元素の数は118個ということですが、この「囲み記事」には、原子番号1番の水素から105番のドブニウムまでの105個の元素が中国語で表記されています。すべて漢字1文字です。構成を見ると、“金”及び“かねへん(金偏)”の漢字が「锂 lì: リチウム、铍 pí: ベリリウム」など82個、“气”を含む漢字が「氢 qīng: 水素、氦 hāi: ヘリウム」など11個、“いしへん(石偏)”の漢字が「硼 péng: ホウ素、碳 tàn: 炭素」など10個、“さんずい”及び“水”を含む漢字が「溴 xiù: 臭素、汞 gǒng: 水銀」の2個、総計105個です。

元素名の中国語表記を見て感心するのは、漢字を見るとその元素の常温(15~25℃)での状態(気体か液体か固体か)が分かるということです。すなわち、常温で気体のものは“气”を含む漢字で、液体のものは“さんずい”及び“水”を含む漢字で、固体のものは“かねへん(金偏)”と“いしへん(石偏)”の漢字で表しているのです。固体のものは、更に結晶性の

ものか非晶質のものかで、“かねへん”の漢字と“いしへん”の漢字とを使い分けています。

このような優れた表記法を採っているのですが、意外な発見が一つありました。それは、“xī”と発音する元素が2つ存在するということです。原子番号34番のセレン“硒 xī”と50番の錫“锡 xī”がそうです。どうして同音の存在を認めたのか、知りたところどころです。更には、14番の珪素(けいそ)の旧称は“矽 xī”、54番のキセノンの旧称も“氙 xī”だったらしく、どういうわけか“xī”という音は元素名として相性が良かったようです。

ところで、常温では気体である11個の元素を表す漢字は“气”の部首が使われていますが、この中日辞典には、部首“气”の漢字が20個あります。そのうち16個は、元素名を含む化学関係の用語です。その中に興味深いものがありました。

“气 piē” : プロチウム、軽水素

“氘 dāo” : デューテリウム、重水素

“氚 chuān” : トリチウム、三重水素

漢字の作り方がとてもユニークだと思いませんか。

終わりに、【元素 yuán sù】の“元”と【原子 yuán zǐ】の“原”に関わるおもしろい記述が、この中日辞典にあるので紹介しておきましょう。

【原来 yuán lái : 〈副詞〉もとは、以前には、▶いまはもうそうではない意味を含む。なんだ(…であったのか) ▶それまでは気がつかなかったことに気がついたときに発する言葉。】という語がありますが、“原来”は古くは“元来”と書かれた。異民族統治の時代である“元”がまた“来”るとの意味を避けて、明代以後、同音の“原”を当てて“原来”と書くようになったといわれる。しかし、今でも時には“元来”と表記されることもある。…とのことです。

▶ 元素 yuánsù (化学元素) ◀

| 原子序数<br>(元素符号) | 元 素 名 | 日本語の名称   | 原子序数<br>(元素符号) | 元 素 名 | 日本語の名称    |
|----------------|-------|----------|----------------|-------|-----------|
| 1(H)           | 氢qīng | 水素       | 53(I)          | 碘diǎn | 沃素(き?)    |
| 2(He)          | 氦hài  | ヘリウム     | 54(Xe)         | 氙xiān | キセノン      |
| 3(Li)          | 锂lǐ   | リチウム     | 55(Cs)         | 铯shè  | セシウム      |
| 4(Be)          | 铍pí   | ベリリウム    | 56(Ba)         | 钡bèi  | バリウム      |
| 5(B)           | 硼péng | 硼素(ぼ?)   | 57(La)         | 镧lán  | ランタン      |
| 6(C)           | 碳tàn  | 炭素       | 58(Ce)         | 铈shì  | セリウム      |
| 7(N)           | 氮dàn  | 窒素(じ?)   | 59(Pr)         | 镨pǔ   | プラセオジウム   |
| 8(O)           | 氧yǎng | 酸素       | 60(Nd)         | 钕nǐ   | ネオジウム     |
| 9(F)           | 氟fú   | 弗素(ふ?)   | 61(Pm)         | 钷pǐ   | プロメシウム    |
| 10(Ne)         | 氖nǎi  | ネオン      | 62(Sm)         | 钐shān | サマリウム     |
| 11(Na)         | 钠nà   | ナトリウム    | 63(Eu)         | 铕yǒu  | ユーロピウム    |
| 12(Mg)         | 镁měi  | マグネシウム   | 64(Gd)         | 钆gá   | ガドリニウム    |
| 13(Al)         | 铝lǚ   | アルミニウム   | 65(Tb)         | 铽tè   | テルビウム     |
| 14(Si)         | 硅guī  | 珪素(け?)   | 66(Dy)         | 镝dī   | ジスプロシウム   |
| 15(P)          | 磷lín  | 磷(りん)    | 67(Ho)         | 铥huō  | ホルミウム     |
| 16(S)          | 硫liú  | 硫黄(りゅう)  | 68(Er)         | 铱ěr   | エルビウム     |
| 17(Cl)         | 氯lù   | 塩素       | 69(Tm)         | 铥diū  | ツリウム      |
| 18(Ar)         | 氩yà   | アルゴン     | 70(Yb)         | 镱yì   | イッテルビウム   |
| 19(K)          | 钾jiǎ  | カリウム     | 71(Lu)         | 镱lǚ   | ルテチウム     |
| 20(Ca)         | 钙gài  | カルシウム    | 72(Hf)         | 铪hā   | ハフニウム     |
| 21(Sc)         | 钪kàng | スカンジウム   | 73(Ta)         | 钽tǎn  | タンタル      |
| 22(Ti)         | 钛tài  | チタン      | 74(W)          | 钨wū   | タングステン    |
| 23(V)          | 钒fán  | バナジウム    | 75(Re)         | 铼lái  | レニウム      |
| 24(Cr)         | 铬gè   | クロム      | 76(Os)         | 锇é    | オスミウム     |
| 25(Mn)         | 锰měng | マンガン     | 77(Ir)         | 铱yī   | イリジウム     |
| 26(Fe)         | 铁tiě  | 鉄        | 78(Pt)         | 铂bó   | 白金        |
| 27(Co)         | 钴gǔ   | コバルト     | 79(Au)         | 金jīn  | 金         |
| 28(Ni)         | 镍niè  | ニッケル     | 80(Hg)         | 汞gǒng | 水銀        |
| 29(Cu)         | 铜tóng | 銅        | 81(Tl)         | 铊tā   | タリウム      |
| 30(Zn)         | 锌xīn  | 亜鉛       | 82(Pb)         | 铅qiān | 鉛         |
| 31(Ga)         | 镓jiǎ  | ガリウム     | 83(Bi)         | 铋bì   | ビスマス      |
| 32(Ge)         | 锗zhě  | ゲルマニウム   | 84(Po)         | 钋pō   | ポロニウム     |
| 33(As)         | 砷shī  | 砒素(び?)   | 85(At)         | 砹ài   | アスタチン     |
| 34(Se)         | 硒xī   | セレン      | 86(Rn)         | 氡dōng | ラドン       |
| 35(Br)         | 溴xiù  | 臭素(きゅう?) | 87(Fr)         | 钫fāng | フランシウム    |
| 36(Kr)         | 氪kè   | クリプトン    | 88(Ra)         | 镭léi  | ラジウム      |
| 37(Rb)         | 铷rú   | ルビジウム    | 89(Ac)         | 锕ā    | アクチニウム    |
| 38(Sr)         | 锶sī   | ストロンチウム  | 90(Th)         | 钍tǔ   | トリウム      |
| 39(Y)          | 钇yǐ   | イットリウム   | 91(Pa)         | 镤pú   | プロトアクチニウム |
| 40(Zr)         | 锆gào  | ジルコニウム   | 92(U)          | 铀yóu  | ウラン       |
| 41(Nb)         | 铌ní   | ニオブ      | 93(Np)         | 镎ná   | ネプツニウム    |
| 42(Mo)         | 钼mù   | モリブデン    | 94(Pu)         | 钷pǐ   | プルトニウム    |
| 43(Tc)         | 锝dé   | テクネチウム   | 95(Am)         | 镅méi  | アメリシウム    |
| 44(Ru)         | 钌liǎo | ルテニウム    | 96(Cm)         | 镆mù   | キュリウム     |
| 45(Rh)         | 铑lǎo  | ロジウム     | 97(Bk)         | 锫péi  | バークリウム    |
| 46(Pd)         | 钯bǎ   | パラジウム    | 98(Cf)         | 锿kāi  | カリホルニウム   |
| 47(Ag)         | 银yín  | 銀        | 99(Es)         | 镱āi   | アインスタイニウム |
| 48(Cd)         | 镉gé   | カドミウム    | 100(Fm)        | 镆fèi  | フェルミウム    |
| 49(In)         | 铟yīn  | インジウム    | 101(Md)        | 钶mèn  | メンデレビウム   |
| 50(Sn)         | 锡xī   | 錫(し?)    | 102(No)        | 鐳nuò  | ノーベリウム    |
| 51(Sb)         | 锑tī   | アンチモン    | 103(Lr)        | 铷láo  | ローレンシウム   |
| 52(Te)         | 碲dì   | テルル      | 104(Rf)        | 𬵿lú   | ウンニルクアジウム |

注：104番元素はクリャトビウム、ラザフォルジウムとも呼ばれるが、発見には疑問もある。未確定の105番元素は“𬵿hǎn”という。



## 箱根の山寺で平家琵琶を聴く

福島 ひろこ 裕子

小寒を過ぎてなお、穏やかなとある日曜日、夫と共に箱根の阿<sup>あみだじ</sup>弥陀寺を訪れました。琵琶と紫陽花の寺として知られる阿<sup>あみだじ</sup>弥陀寺は、小さいながらも1604年に弾誓<sup>たんせい</sup>上人により開山された由緒あるお寺です。

### ●平家琵琶に惹かれるわけ

このお寺のご住職が琵琶の名手だと教えてくれたのは中国語の勉強仲間でした。野山の散策がてらこの山寺を訪れ、ご住職の弾語りで「敦盛」などを聴かせてもらったとのこと。私は好奇心がむくむくと頭をもたげるのを感じました。

岡山で小中高を過ごした私の遠足の定番は四国の屋島や栗林公園でした。瀬戸大橋が架かる前はフェリーで瀬戸内海を渡ります。静かな海を眺めつつ、そこに眠る平家の武者たちに思いを馳せる枯淡な女子高生でした。そんなことから、機会あれば平家琵琶を聞きたいと思っていたのです。

### ●弾語りの予約とお寺への行き方

前日の朝、お寺に電話をして琵琶を聴きたい旨告げると「午前の部は11時から午後は1時半から、約1時間です。お布施は一人千円」とのこと。



阿弥陀寺本堂と左手前に葵の御堂

阿弥陀寺への電話は、午前8時～9時、正午頃、夕方6時以降が繋がりが易いです。講演会、演奏会等でご住職が外出されることもあるので、必ず予約してから来てくださいとのこと。二人以上の予約があれば演奏を聴かせて頂けます。予約は末尾に掲載の電話でどうぞ。HPではお寺の詳しい案内もご覧になれます。

箱根湯本駅を過ぎてから右折し、道なりに行くと山道の入口に目印の石仏が立っています。車一台通るのがやっとの狭い道を上って行くと駐車場

と思しき広場があり、ここに車を停めて石段を登ると、ものの数分で本堂が見えて来ます。

箱根湯本駅から歩けば30分。塔ノ沢駅からは徒歩約20分で、そちらのルートなら「阿育王山」の扁額の掛かった山門をくぐり、風情ある昔の参道を上ることになります。(阿育王=アショーカ王)



祭壇にご住職を見守る阿弥陀如来さま



ご住職に薩摩琵琶の構え方を教わる

## ●本堂と本尊の由来

本堂は240年ほど前に小田原の庄屋さんのお屋敷を移築したものだそうです。賽銭箱の上に百万遍転法輪が掛かっており、珍しさからガラガラ回させてもらいました。念仏を唱えながら回すと功德があるとか。本堂左手前の小さなお堂（葵の御堂）には、皇女和宮さまのお位牌が祀られているそうです。

演奏の始まる午前11時前になると、本堂正面の引き戸を開けてくださり「寒

いのでストーブに当たりながらお聞きなさい」とご住職。ご本尊の阿弥陀如来様は両国の回向院から1700年頃に寄進されたそうです。

## ●いよいよ弾語りのはじまり

ご住職の水野賢世<sup>けんせい</sup>さんは24歳でこの寺を任されてから78歳の現在に至るまで、八面六臂の活躍でこの寺を盛り立てて来られました。山寺の高低差のある広い敷地を整備し、紫陽花を植え、琵琶を交えた法話と演奏で知る人ぞ知る存在になります。

この日は実は私たち夫婦の貸切でした。万葉集の山部赤人の和歌に始まり、ドイツの詩人ツェーザル・フライシュレンの「心に太陽を持て」、平家物語の「壇ノ浦」まで。法話を交えて1時間余り、琵琶の弾語りを聴かせてくださいました。

いつも和歌、詩、語り物と言う構成にされること。他にどんなレパートリーをお持ちかお尋ねすると、本能寺、皇女和宮、青の洞門、白虎隊、羅生門から茨木などなど。

## ●和宮さまの念持仏を拝見

演奏と法話の後、和宮さまのことをお尋ねする



賽銭箱の上にかかる百万遍転法輪

と、ご住職が特別に見せてくださったものがあります。宮さまの念持仏であった黒本尊です。恐れ多くて写真を撮ることは出来ませんでした。小柄な和宮さまを思わせるほっそりとした美しい阿弥陀様で、黒光りした様に年月を感じました。

「惜しまじな

君と民との為ならば

身は武蔵野の

露と消ゆとも」

和宮さまが詠まれたこの歌からは、どれほどのご覚悟で徳川家に降嫁されたのかが窺

い知れます。晩年はこの寺にほど近い塔ノ沢の旅館中田屋（環翠楼）で静養され、32歳の若さでお亡くなりになったそうです。

## ●人生は七十歳から挑戦！

帰り際に自分自身もいくつかの楽器を演奏することをお伝えすると、大切な琵琶を触らせてくださいました。ご住職がなさるのは盲僧琵琶の一種、薩摩琵琶。堅い桑の木で出来ており、扇形に広がったバチが特徴です。ずっしりとした重さに、ご住職の人生が詰まっているかのように感じました。後ろに掛かっている「人生は七十歳から挑戦」は、ご住職がお書きになった書にしてその日の法話のテーマです。再びこちらを訪れる折には、皇女和宮さまゆかりの演目を聴かせて頂きたいと告げ、山を降りました。

~~~~~

【阿育王山 阿弥陀寺】

神奈川県足柄下郡箱根塔之澤 24

電話：0460-85-5193

※箱根湯本観光協会 HP に紹介あり

www.hakoneyumoto.com/exp/18

■「箱根の山寺で平家琵琶を聴く」を寄稿してくださった福島裕子さんから、追加で琵琶のお話を頂いたのですが、誌面に余裕がなかったので、その項だけ、ここでご紹介させていただきます。

【琵琶はどこから】 福島 裕子

漢代から史書にその名が登場し、枇杷、毘婆、比巴などとも書かれます。そのルーツは古代ペルシャの「Barbat」と言われます。

唐代の中国には、①曲頸 4 弦琵琶、②直頸 5 弦琵琶、③円形胴秦琵琶の 3 種類がありました。

①は西アジア起源で中国の琵琶の元となります。奈良時代に日本に伝わり、雅楽の楽琵琶がくびわの祖となります。②はインドから中国を経て日本に伝わりますが、唐代末に廃れてしまいます。(正倉院の五弦琵琶) ③は中国で生まれ、阮咸げんかん、月琴げっしんの元となります。日本にも伝わり明清楽みんしんがくに用いられました。

日本の琵琶は楽琵琶と盲僧琵琶に大別されます。素材や形状は様々で 4 弦と 5 弦の両方があります。パチの形もジャンルによって異なります。

鎌倉時代はじめに『平家物語』の伴奏楽器として発展した平家琵琶は、楽琵琶と盲僧琵琶を折衷したものです。琵琶は一面、二面と数えます。



▶ふちのべ水墨画教室会員募集中◀

時間：毎月第二、第四土曜日

午後 2 時～4 時

場所：大野北公民館

(JR 淵野辺駅南口徒歩 1 分)

月謝：4000 円/2 回

満柏先生が優しく教えます。

絵心なし OK！手ぶら OK！

問合せ：045-664-3789 (満柏まんはく)



★歌、スキットで楽しく学ぶ

▶中国語の発音連続講座◀

初めて中国語の発音に触れる方、そしてあらためてもう一度発音を学び直したい方を対象に開講します。1 回でも 4 回でも自由に参加してみてください。

■A：中国民謡「草原情歌」で学ぶ発音全般

① 3月20日 (土)

「母音、n-ng と声調」

② 3月21日 (日)

「子音—無気音・有気音、卷舌音」

■B：簡単なスキットで学ぶ発音全般

③ 4月3日 (土) 「母音、n-ng と声調」

④ 4月4日 (日)

「子音—無気音・有気音、卷舌音」

時間：各回共 13:30～16:30

会場：練馬区役所本庁舎 19 階

(練馬駅徒歩 7 分)

講師：元日中学院副学院長 鈴木 繁 先生

参加費：各回千円

連絡先：練馬中文教室 090-3509-2021

(要予約)

【わんりいの催し】

春は活動の季節です！！

皆様のご参加を歓迎します

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体のを抜いて気持ちよく発声しよう！

声は健康のバロメーター！！

*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
- 日時：3月16日（火）10：00～11：30
4月20日（火）10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

### ❀❀ 中国語で読む 漢詩の会 ❀❀

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

録音機をお持ちの方はご持参ください。

- 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
- 日時：3月14日（日）10:00～11:30  
4月11日（日）10:00～11:30
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授  
現桜美林大学孔子学院講師
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）  
Email:ukiuki65.jp.jp@yahoo.co.jp  
(有為楠)

#### ■ 3月・4月定例会

- ▲ 3月9日（火）13：30～
- ▲ 4月8日（木）13：30～  
三輪センター 第三会議室

#### ■ ‘わんりい’ 4月号の発送

- ▲ 4月1日（木）10：00～  
三輪センター 第二会議室

## —— 編集後記 ——

2020年2月2日は、わんりいの新年会でした。横浜港を出港したダイヤモンド・プリンセスが、香港に寄港後、船内で新型コロナウイルスを発症した乗客が見つかり、横浜港に帰港したのが2月3日。船は波止場で封鎖され、船内でコロナ・ウイルスとの防疫戦争が繰り広げられました。その間に、国内でも、空港からウイルスが侵入し、街中に蔓延し始め、さまざまな防疫措置が執られるようになりました。

新型のウイルスによるパンデミックと判明して、世界中で防疫にあたっていますが、未だに収束させることができていません、

こうして振り返ってみると、昨年2月2日にわんりいの新年会を開催できたのは奇跡のような気がします。

2021年の新年会はできませんでしたが、今年一年しっかりコロナ・ウイルスと戦って、2022年には、楽しい新年会が開けるように、みんなで一緒に頑張りましょう。

～・～・～・～・～・～

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します  
年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい  
10月以降の入会は、当年会費1000円。

■ 問合せ：044-986-4195（寺西）

## ‘わんりい’ 261号の主な目次

|                          |    |
|--------------------------|----|
| 寺子屋・四字成語（40）狐假虎威……………    | 2  |
| 「日译诗词」(10) 『踏歌詞』劉禹錫…………… | 3  |
| 「漢詩の会」だより（45）李白『送友人』……   | 4  |
| 「中原」雑感（10）中原逐鹿……………      | 7  |
| 中国の面白い神話伝奇物語（4）……………     | 10 |
| 秦皇島をご存知ですか（2）……………       | 12 |
| 「中日辞典」からの意外な発見（5）……………   | 15 |
| 箱根の山寺で平家琵琶を聴く……………       | 17 |
| 「みんなの広場」……………            | 19 |
| ‘わんりい’の催し・入会案内……………      | 20 |